

大つごもり箱物語

ナレーション／N1 (祖母)

ナレーション／N2 (孫)

鶴

亀

父 (次郎)

お松

男 (龍之介)

※ 挿入歌 童謡「浦島太郎」

N 1 むかしむかし、海に沈む夕日がたとえようもなく美しい小さな村がありました。この村には、「鶴は千年、亀は万年」という中国の古い言い伝えにあやかっ
て、「鶴」と「亀」と名付けられた二人の姉妹しまいがおりました。長寿を願う親の思いが込められていたのでしょう。小さな子どもがちよつとした病気で死んでしまうことが珍しくなかった時代です。とは言え、いくら縁起がいいからといって、かわい
い娘たちに、鳥はまだしも爬虫類はちゆうるいの名前をつけるのはいかなものか。さらに言わせてもらうなら、「鶴」と「亀」ではその寿命に九千年もの開きがあります。
この不公平を鶴ちゃんに気付かれ、恨み言を言われでもしたら、なんと申し開きをするつもりだったのでしょうか。

N 2 余計な心配はいいから先いつて。

N 1 「お姉ちゃんなんだから我慢しなさい！」という、たいへん都合のいい決まり文句があるにはありますが……。

N 2 もうそれはいいから。続き。

N 1 幸い、鶴と亀の寿命問題で家庭内の空気が悪くなるようなこともなく、姉妹はお父さんと三人でたいへん仲良く暮らしていました。お父さんの仕事は「リョウシ」でした。「リョウシ」と言っても、鳥や獣を捕る方の猟師さんではありません。先ほど「海に沈む夕日が美しい村」と言ったのを覚えておいでなら、おおよその見当はつくかもしれません、
「リョウシ」は「リョウシ」でも、魚や貝を捕る方の漁師さんです。

N 2 うん。わかるから。次。

N 1 姉妹にはお母さんがいませんでした。お母さんは亀ちゃんを産んで間もなく、帰らぬ人となってしまったのです。当時は産後の肥立ちが悪くて亡くなってしま
う人も、決して珍しくはなかったのです。

N 2 昔はお産も命がけだったんだね。

N 1 お産が命がけなのは昔も今も変わりません。ですからお母さんを大切にしま
しょう。お母さんのお母さんは、尚更大切にしましょう。

N 2 はい、それは重々わかっています。

N 1 わかっているなら結構です。

N 2 わかつてるからおばあちゃん。話進めて？

N 1 お母さんは早くに亡くなり、お父さんは朝から晩まで忙しく漁に出ていたが、鶴ちゃんと亀ちゃんは、さびしい思いをすることも、道を踏み外すようなこともなく、立派な娘たちに成長しました。なぜなら二人のそばには、お松さんがいてくれたからです。

波の音。

鶴 亀ちゃん！ そろそろあがっておいでー。ごはんの支度しよー。ねえ、亀ちゃん。おい。お亀ちゃん。こら！ いい加減にしなさい！ 聞いてんのか、亀！

お松 どうしたの鶴ちゃん。大きな声出して。

鶴 ああ、お松さん。亀ちゃんがまた海にもぐったきり上がってこないのよ。

お松 もうすぐ日が暮れるじゃないの。

鶴 だんだん波も高くなってきてるのに……。

亀 (ばしやばしやと波をけりながら) ひゃあー。大漁大漁！ 鶴ちゃん見て！ サザエがこんなに！

鶴 もー！ 必要以上に獲っちゃいけないっていつも父さんに言われてるでしょ？

亀 お松さんにも分けてあげようと思って。

お松 ありがとうね、亀ちゃん。でも海を甘く見ては絶対にダメ。海の中ではどんなことが起こるかわかりやしないんだから。

亀 大丈夫だよ。子どもの頃から潜ってるんだから。

お松 いくら泳ぎが得意でも、引潮にさらわれたらどうするの？ 急に足がつたらどうするの？ サメに襲われたらどうするの？ 鯨に飲み込まれたらどうするの？ 海坊主と鉢合わせでもしたら……

亀 もうわかったよ。

お松 帰りたくても帰れなくなってしまうのよ？ そんなことになったら、お父さん

んがどれだけ悲しむか。

亀 はい。これから気をつけます。

お松 約束よ？ お父さんを心配させるようなことはしないって。

亀 約束するからお松さん、これお刺身とツボ焼きにして食べようよ！

お松 そうね。たくさんあるから、甘辛煮も作りましょうか。

亀 わあ、(くしゃみ) お父ちゃん…(くしゃみ) 喜ぶよー。(くしゃみ)

お松 ほら。早く着替えていらっしやい。

亀 はい。

お松 ……亀ちゃんはいつも元気ねえ。

鶴 お松さん、ごめんね。

お松 ん？ なにが？

鶴 ……亀ちゃんが無茶するせいで、弟さんのこと、思い出しちゃったんじゃない？

お松 そんなことないわよ。

鶴 ほんとうに？

お松 だって、いつも心に残っていることを、思い出すとは言わないでしょう？

N 1 お松さんには龍之介という弟がおりました。子どもの頃から海にいたのが好きで、それはたいそうな泳ぎの名人でした。けれどある日、ちょうど今の亀ちゃんのよう、貝を捕るため海へ潜りに出かけて行って、それきり帰ってはこなかったのです。お母さんは息子の帰りを信じて、毎晩浜辺でかがり火を焚きました。

N 2 なにそれ。おまじないかなんか？

N 1 今どきの若い人にはかがり火も通じないのかと年寄りには驚きをかくせませんが、かがり火と言うのは、暗いところを明るく照らすために燃やす火のことです。お母さんは息子が帰り道で迷わないよう、目印に火を焚いたので。

N 2 そうでしたか。お母さんとはありがたいものですね。

N 1 仰るとおりです。そのお母さんもうに亡くなり、お松さんはたった一人で、弟の帰りを待ち続けていたのです。

鶴 ねえ父さん。お松さんの弟がいなくなってもうどれくらい？

父 俺がここに来た時には、もうお松さん独りきりだったからなあ。二十年以上にはなるんじゃないか？

鶴 そうかあ……。ひよつとしてまだ信じてるのかな。帰ってくるかもしれないって。

父 死んじまったと決まったわけじゃねえからなあ。

鶴 だけど二十年だよ？

父 海の中じゃ、どんなことが起こるかわかりやしねえからよ。

亀 父ちゃんはここに来る前、どこにいたの？

父 どこって……まあ、ここと似たようなちいせえ村だよ。

鶴 どうしてここに移って来たの？

父 そりゃあおめえ……う、海に沈む夕日が、まあなんてきれいなところなのかしらーと思つてよ。

亀 へえ。意外。そしてちよつと気色悪い。

父 うるせえ。いいからさっさとメシくつちまえ。

亀 あ！ そのでつかいサザエね、ものすごく捕るの大変だったんだよ。岩の間にガツチリはさまつたの。

父 おい亀。サザエ捕るのはいいけどよ、遅い時間に浜辺なんかふらふらしたりするんじゃないぞ？

亀 大丈夫だよ。もう子どもじゃないんだから。

父 子どもじゃねえから気をつけろって言うてんだよ。最近、港のあたりを怪しい男がうろついてるって噂だからよ。

鶴 えー。なんか怖いね。

父 まあなるべく一人で出歩かねえこつた。お、今日のワカメの味噌汁うめえじゃねえか。鶴。おまえ料理の腕あげたなあ。

鶴 それ、お松さんが作ってくれたんだよ。

父 ああ……なんだ、そうかよ。

鶴 あと父さんがさつきからバクバク食べてる甘辛煮もね。

亀 お松さんどうして帰っちゃったんだろ。一緒に食べようって言ったのに。

父 あの人は昔っから遠慮深いからな。

亀 もうさ、父ちゃんお松さんと結婚しちやえば？

鶴 うん。そうだね。

父 なにバカなこと抜かしてやがんだ。

亀 お松さんは父ちゃんのこと好きだと思うよ？ ワカメの味噌汁、父ちゃん好物でしょ？

父 そりゃそうだけどよ……。

鶴 今までずっと一人でいるのも、弟さんのことだけじゃないんじゃない？

亀 お似合いだと思っけどなあ。

父 俺とお松さんじゃあ……年が違いすぎる……。

鶴 そんなことないでしょ。丁度いいくらいだよ。

亀 そうだよ。お松さん、若く見えるけど、もう四十をとくに超えてんだよ？

父 あのなあ。俺たちはただでさえお松さんに甘え過ぎなんだよ。まあ、元はといえば俺がいけねえんだけどな。死んだ母ちゃんの幼なじみってだけで、なにかと頼りにしちゃったから……。けどどいつまでもあの人の親切にぶらさがってるわけにはいかねえだろ。

亀 そう思うんなら、責任とってさつきと一緒にいるんだね。

父 聞いたふうな口ききやがって……！ 大体おまえら、もうおつかさんが欲しいって年でもねえんだから、親の結婚より自分の嫁入りの心配しろってんだ！

鶴 父さんを一人残して、あたしたちお嫁になんかいけないよね？

亀 いけないいけない。

父 だったら二人揃って一生この家にいやがれ！ 今日はどうしまいだ！ 俺は寝る！（どかどかと足音）

亀 うーん。ダメか。

鶴 いや、あともうひと押しって気がする。

亀 そうかな？

鶴 うん。いつもより切り返しに説得力と勢いが無い。

亀 おお。そう言えば。

父 (再び大きな足音) いいか、鶴亀。お松さんに今みたいな話、絶対にするんじゃないぞ！

波の音。

亀 ねえ、お松さんはうちの父ちゃんのことどう思う？

お松 どう思うって……丈夫で働き者だし、好き嫌いもないし、男手ひとつであなたたちをここまで立派に育ててきたし、そりゃあ……

亀 好き？

お松 え？

鶴 ちよつと亀ちゃん……。

亀 好き？

お松 ……好きですよ。お父さんも鶴ちゃんも亀ちゃんもみんな好き。

亀 だったらさ……。

鶴 飛ばし過ぎだって……。

お松 でもね、あたしが一番最初に好きになったのは、あなたたちのお母さん。子どもの頃から、いつもそばにいて助けてくれたの。弟がいなくなった時も、お千代ちゃんだけは「いつか必ず帰ってくるよ」って言ってくれた。

鶴 お母さん……そんな無責任なこと言っ……。

お松 ううん。どれだけ励まされたか知らないわ。あたしは弱虫だったから、強くて優しいお千代ちゃんのが、ずっとうらやましかった。あんなふうになりたくて、よくなんでも真似したわ。今でもそうよ。お千代ちゃんが生きていたらきっとこうするだろうって、勝手に真似して、あなたたちのお世話を焼いてるの。だから恩義に感じたりしないよね。

亀 ……じゃあ、父ちゃんと結婚してくれる？

お松 ……あたしの話、聞いてたのかしら。

亀 母ちゃんの真似なんてケチなこと言ってないで、本当のお母さんになっちゃわない？

鶴 こら！ ケチとか言わないよ！

お松 ……亀ちゃん。まさかお父さんにそんな話してないでしょうね？

男 あのーすみません。ちよつとよろしいでしょうか？

亀 いま大事などこなんだけどなんででしょう？

男 お取り込み中恐れ入ります。つかぬことを伺いますが、この辺りに、浦島次郎さんて方はいらつしやいませんか？

鶴 浦島次郎は父ですけど……。

男 ああ！ よかった！ やっぱりはなから人に尋ねて回るんだった。いやあ、お顔をなんとなく覚えてたものですから、自力で探し出せるんじゃないかなあと思つたら、まあ殊ことのほか手間取つちつて。

亀 (ヒソヒソと) 鶴ちゃん、この人じゃない？ 父ちゃんが言った「港をうろついでる怪しい男」って。

鶴 (ヒソヒソと) うん。なんだか間抜けそうだけど、見るからに怪しいもんね。
(男に) 父になにかご用ですか？

男 はい、実は……。

お松 龍之介……おまえ、龍之介じゃないの……。

鶴・亀 えーっ!?

男(龍之介) ……おつかさん？

お松 誰がおつかさんか！ あたしよ、龍之介。姉ちゃんのお松だよ！

龍之介 姉ちゃん!? なんだ、ちよつとみない間にずいぶんとくたびれて……。おつかさんそつくりじゃないか。

お松 よく帰って来たね、龍之介。

鶴・亀 えーっ!?

N 2 たとえ鶴亀姉妹は騙せても、私の目はごまかせません。お松さんは次郎とかいうこのお父さんに気がありますね。よくあることです。親友と同じ人を好きに

なってしまうのは。ましてや「なんでも真似していた」というのだったら尚更でしょう。でもお松さんは遠慮深い人のようですから、若くして亡くなったお千代さんへの気兼ねもあって、自分の気持ちをなかなか素直には言い出せないのだと思います。

N 1 話の流れからいって、いま注目すべきポイントはそこではありません。

N 2 えーそうかな？

N 1 どこをどう考えても、龍之介が帰って来たことについて語るのが筋というものでしょう。

N 2 だって気になるよ。お松さんの恋の行方。

N 1 私には空気の読めない孫の行く末の方が気になりますが、話を先に進めます。こうして龍之介は、生まれた村へひよつこりと帰ってきました。驚いたことにこの弟は、二十数年前に海でいなくなった時からまったく年をとっていないようにでした。しはんせいぎ四半世紀近くもの間、一体彼はどこにいたというのでしょうか。

龍之介 竜宮城だよ。

鶴 竜宮城!?

亀 え、それってほんとにあるんだ？

龍之介 絵にも描けない美しいところだったよ。

鶴 どうやって行ったんですか？

龍之介 貝を捕りに海に潜ったら、うっかり引潮にさらわれて、沖に流されたところでサメに出くわしたんだ。慌てて逃げようとしたんだけど、急に足がつつちゃって……。

お松 ほらね、亀ちゃん。海ではそういうことが起こるのよ。

亀 いや、いまそんな話してる場合じゃないでしょ。

龍之介 その時、目の前に虹色の亀が現れて、連れて行ってくれた先が竜宮城だったんだよね。

鶴 助けられた亀に連れられて……。

亀 おとぎ話とはちよつと違うね。

龍之介 うん。だからおいらは浦島太郎みたいに、接待はしてもらえなかった。

鶴 せっかく竜宮城まで行ってそれはなんというか……残念でしたね。

龍之介 当然だよ。こつちがお札をしなきゃならない立場だからね。それで竜宮城の門番として雇ってもらうことにしたんだ。なのに最初の仕事で大ポカをやらかしちゃって……。

お松 龍之介。今日はもう疲れたでしょう。お風呂を沸かしたから、ゆっくり汗でも流しなさい。

亀 すごいね、お松さん。ここで話の腰を折れるなんて。

お松 この子は昔っからどうにもぼんやりしたところがあつてね。あたしも母も、それでずいぶん気をもんだものだけれど、まさか海の中のご奉公先でもなにかやらかしていたなんて……。そんな話聞きたくないわ。せっかく久しぶりに会えたのに。

龍之介 久しぶりって言われてもなあ。竜宮城には半日もいなかったはずなのに……。あちこちずいぶん変わっちまってるんだもの。姉ちゃんに会うまで、ここが自分の村だつてわからなかったよ。

亀 ほんとだ。ぼんやりしてる。

鶴 それで……父さんとはどういったご関係なんですか？

父 (戸が開く音とともに) おい！ 鶴亀！ なんだこの置き手紙。「お松さんの家にて待つ」って洒落しやれたつもりか！ おまえらまたなんか妙なこと企んでるんじゃないかねえだろうな！

龍之介 ……浦島次郎さん？

父 ……誰だい、あんた。

亀 港をうろついてた怪しい男だよ。

鶴 お松さんの弟だったの！

亀 ようやく帰ってきたんだよ！

父 ……本当なのかい？ お松さん。

お松 はい。おかげさまでこの通り。

父 この通りだったって……うちの娘たちとたいして変わらねえ若衆わかしゅじゃねえか。

亀 聞いてびっくりだよ父ちゃん。なんとこの龍之介さんはね……。

龍之介 うん！ 確かに浦島次郎さんだ。だいぶ老けちまつてるけど間違いない！

お松 これ！ ぶちようほう 不調法ですよ。

父 俺は、弟さんの顔に見覚えなんてねえんだが……。

龍之介 それはご無理もありません。おいらだつて、門の前からちらつとお見かけただけですし、なによりこちらとあちらでは、流れる時の早さがだいぶ違うようですから。

鶴 どういうこと？ 父さん。

父 し……知らねえよ。お、お松さん！ お、弟さんが無事に戻ってなによりだつたな！ じ、自慢の腕で、う、美味いうまもんでも、こ、こ、こしりやえてやったつたらいいや。

亀 口がうまく回ってないよ父ちゃん。

父 いいから帰るぞ鶴亀。久しぶりの姉弟きょうだい水いらずに水を差すたあ、おまえたちも気が利かねえな。

龍之介 お待ちください！ 浦島さん！

父 ……お人違いじゃねえんですか？ 確かに俺は浦島だが、太郎じゃなくて次郎だし、竜宮城なんてところは行ったことも見たことも……。

鶴 誰もまだ、竜宮城の話なんてしてないよ……。

お松 次郎さん……。あなたやっぱり……。

龍之介 お帰りになる際、必ずお持たせするようにと申しつけられておりましたのに、うっかりお渡ししそこなってしまう、乙姫様にはこつぴどく叱られました。そんなわけで、遅ればせながらお届けにありがとうございました、お土産の玉手箱でございます。何卒よしなにお納めくださいませ。

N1 古くは日本書紀や万葉集にも書かれた浦島太郎の伝説は、日本人なら知らない人はいないであろう超有名なおとぎ話です。

N2 もちろん私だつて知っています。(歌う)

むかしむかし浦島は

助けた亀に連れられて

竜宮城へ来て見れば

絵にもかけない美しさ

N 1 (歌う) 乙姫様の御馳走に

鯛や比目魚ひらめの舞い踊り

ただ珍しく面白く

月日のたつのも夢のうち

N 2 二番は知らないな。

N 1 (さらに歌う) 遊びにあきて気がついて

お暇いとま乞こいもそこそこに

帰る途中の楽しみは

土産に貰った玉手箱

……五番まで続くのですがこのくらいにしておきましょう。

N 2 つまり、浦島次郎も竜宮城帰りだったってわけ？

N 1 そういうことです。ですが次郎さんは、龍之介がはるばる竜宮城から届けに

来たこの玉手箱を、頑かたくなに受け取ろうとはしませんでした。

父 いらねえつたらいらねえんだよ！

亀 くれるっていうんだから素直に貰っておけばいいのに。

父 だってあれだろ？ 絶対に開けちゃいけないんだろ？

亀 龍之介さんはそう言ったね。

父 なんでそんなものくれようとするんだよ。有難迷惑だったの。

亀 開けなければいいだけのことでしょ？

父 絶対に開けるなって言われたら、開けたくなくなるのが人情ってもんだろが！

亀 でもさ、太郎の時とは違って、開けたらどうなるかはもうわかってるんだから。

父 今回も太郎さん時とおなじとは限らねえだろ。それによ、仮しらがに白髪しらがの爺さん

になっちゃうってわかってたとしてもだぞ？ そんな物騒な箱なんか貰った日に

やあ、「なにかの拍子にふたが開いちまったらどうしよう」「だったらいつそのこ

と自分で開けちまおうかしら」って、とにかく気になって気になってなんにも手につきやしねえんだよ！

N2 わかる……。ダメっていわれると余計やりたくなるもんだよね。あ、おばあちゃん知ってる？ OLやってる友達から聞いたんだけど、急いで社内に回覧してほしい書類がある時は、表紙に「マル秘」って書いておくんだって。そうするとあつという間に全員が目を通してくれるらしいよ？

N1 お友だちはろくな会社にお勤めではないようですね。一方、玉手箱を受け取ってもらえない龍之介は、浜に打ち上げられたクラゲのように、それはそれはしよんぼりとしておりました。

龍之介 (ため息) どうしたら受け取ってもらえるのかなあ……。

鶴 ごめんね、龍之介さん。うちの父さん、頑固者で。

龍之介 お鶴ちゃんが謝ることないよ。

お松 次郎さんが「うん」と言わないのも無理ないわ。あちらではつい昨日のことかもしれないけれど、今頃になって突然そんな何十年も前のお土産なんか持って来られても……。

龍之介 おいらがぼんやりしていたせいで……。

鶴 ううん。お手柄ですよ、龍之介さん。もしもその時玉手箱を渡されてたら、父さんの性格からして、絶対ふたを開けていたはずだもの。そうしたらあたしも亀ちゃんも、今頃この世に生まれてなかった。

龍之介 そうか……。まあ、こんなことがなかったら、おいらも姉ちゃんには会えなかっただろうけど……。

お松 たまにはおまえのぼんやりも役に立つことがあるのねえ。

鶴 ……お松さんは知ってたの？ 父さんが竜宮城に行ってたこと。

お松 薄々はね。陸に戻った次郎さんを、恐らく最初に見つけたのが、あたしとお千代ちゃんだったのよ。浜辺をさまよいながら「元いた家も家族もなくなってる」って、ひどく悲しそうにしていたわ。それ以上はなにも話してくれなかったけれ

ど、お千代ちゃんとかつそり言い合ってたの。「竜宮城から帰って来たんじゃないか」って。名前も浦島さんだったしね。

龍之介 やっぱいいじめられてた亀を助けて竜宮城に招かれたらしいよ。おいらと違ってそりゃあ大事な客人きやくじんとして扱われてた。

鶴 あの父さんがねえ……。

龍之介 ……粗相そそうのないようにってあれほどきつく言われてたのに……結局怒らせちゃったもんなあ……。

鶴 別に怒ってなんかなくて。ちょっと困っているだけで。

龍之介 それだって充分な粗相だよ……。

お松 次郎さんにしてみれば、竜宮城を思い出すのはつらいことなのかもしれないわね。楽しい思い出したんでしようけど、その代わりに、一度はすべてを失ったんだもの。

龍之介 ……乙姫様からの贈り物なんて、見るのもイヤになってるのかなあ……。

鶴 とにかく！ 玉手箱のことはしばらく忘れて、まずは元気を出してください。

そうだ。明日、亀ちゃんと三人で釣りに行きましょよ！ いいでしょ？ お松さん。

お松 引潮とサメに気をつけてくれるならね。

鶴 理由はどうあれ、せっかく帰ってきたんですから。今まで心配かけた分、しっかりお姉さん孝行もしくっちゃ！

龍之介 ……ありがとう、お鶴ちゃん。

N 2 ……ちよつと。なんかその二人、イイ感じなんじゃない？

N 1 興味が行くのはそんなところばかりですね。さて、多少ぼんやりはしていても、根が真面目で義理がたい龍之介は、それでも自分のお役目を忘れることはありませんでした。足しげく次郎さんのもとに通っては、恭うやまつしく箱を差し出し、断られ、肩を落とし、不憫ふびんに思った鶴亀姉妹に慰められるという日々が、しばらくの間続いたのです。

亀 も〜っ！ 男つてのはどうしてこう融通がきかないかなあ！

鶴 なんだか二人とも日に日にやつれてきてるよね。

亀 やっぱり父ちゃんの方が折れるべきだと思わない？ とりあえず受取るだけ受取ってさ、持つてるのがイヤだったら、山の中にも埋めちゃえばいいんだよ。

鶴 人さまからの頂き物をそんなふうに来る人なら、もうとつくにやつてるですよ。

亀 まあ今回相手は人じゃないけど、父ちゃんもああ見えて案外律儀なところがあ
るからねえ。

鶴 ……でもさ、父さんが玉手箱を受取っちゃったら、亀ちゃんちよつと困るんじ
やない？

亀 なんで？

鶴 だって、龍之介さん、もう家に来なくなっちゃうよ？

亀 そうかあ……。それはちよつとさびしいなあ……。いや、だけどこのまんまは
よくないよ。毎回あんな悲しそうな顔されるのはこつちだつてつらいもん。

鶴 そうだねえ……。

亀 うん。なんとかしよう！ それで龍之介が家に来てくれなくなつたつて、今度
はこつちから遊びに行けばいいだけの話だし。

鶴 ……うらやましいよ。亀ちゃんは正直で。

N 2 ……おつとなによ。三角関係!?

N 1 その頃、当の龍之介は、とんでもないことを決意していました。

N 2 鶴亀両方とつきあっちゃうとか？

N 1 違います。「竜宮城に帰る」と言い出したのです。

お松 帰るつておまえ……。

龍之介 姉ちゃんの言うとおり、これ以上、次郎さんに迷惑はかけられないよ。

お松 だからつてなにも帰らなくなつて……。

龍之介 だってこのままじゃあ、おいらは玉手箱を猫ババぬすこした盗人になつちまう。

お松 ポーンと投げ返せばいいじゃないの！ 出来るだけ沖の方に向かって！ 重しをつけて！ 思いっきりポーンて！

龍之介 ……本気で言ってるのかい、姉ちゃん。

父 龍之介さん！ わかった！ もらう！ 玉手箱いただく！

龍之介 ……本当ですか？

父 ……ほんともほんと。実はずーつと欲しかったんだよなあ、玉手箱。意地汚きたねえと思われそうで、今まで言えずじまいだったけど。

鶴 よかったね、父さん！ やつと素直になれて！

父 うん！ だから喜んでもらっちゃう。むしろ頂戴？

お松 次郎さん！ 後生ごしやうですからやめてください！ 龍之介のために、あなたがそんな猿芝居を打つことなんてないんです……！

父 ……いや、確かに今のは大仰おおむさうだったが、玉手箱は受け取るよ。

龍之介 最初からそうやって普通に言えればいいんだよ。

父 忘れねえよ。どんなお大尽様だいじんさまでも味わったことがねえつてくらい、夢みてえないい思いをさせてもらったんだ。忘れられるわけがねえ。……ただおかげで俺は、

本当なら生きるはずのねえ時代を生きる羽目になっちゃった。まともな人間とは違っちゃった……。もしも玉手箱なんか手にしたら、今のなんでもねえ暮らしをまた失くしてしまうんじゃないかって、それがこわかっただけなんだ。

龍之介 だったらやつぱり……。

父 でもよ！ 今さらそこまでビクビクすることもねえかなあつて。竜宮城帰ってバレても、みんな大して驚かなかつたし。

鶴 いや、充分驚いたよ。

お松 開けてはいけない箱なんですよ？ そんな気骨きぼねが折れるものを、わざわざ引き取っていただくわけには……。

龍 平気平気！ 縄と鎖でぐるぐるに縛って、屋根裏にでもしまいこんでおけばいいから！

父 ま、そこまでしなくても大丈夫だろ。

亀 えーほんとにく？

父 足りねえ頭でよく考えたんだけどな。浦島太郎が箱を開けちまったのは、なにも誘惑に負けたからじゃねえ。他に頼るものがなかったんだよ。その点俺には、娘たちが二人もいるし、お千代ははかなくなっちゃったが、お松さんもよくしてくれるし、玉手箱を頼みにする謂われなんてまったくねえ。だから大丈夫だ。うん、絶対。きつと。……恐らく。多分……。

鶴 危なっかしいなあ。

父 そういうことだからよ！ 悪かったな。お松さんにもずいぶん気の休まらねえ思いをさせて。

お松 悪いだなんてとんでもない！ こちらこそ申し訳なくて……。ほら龍之介！

ぼんやりしていないできちんとお礼を！

龍之介 ありがとうございます、次郎さん。

父 いや、こちらこそ、身に余る結構なものを頂戴しまして。

龍之介 よかった。無事にお役目が果たせて。

父 おう！

龍之介 これで胸を張って竜宮城に帰れます。

鶴 ……はあ!?

お松 なにを言ってるの、龍之介！ 次郎さんがなんのためにあんな変てこな芝居までしてくれたと……！

龍之介 決めてたんだ。玉手箱を渡しても渡せなくても、竜宮城には戻るって。

鶴 どうして？ 乙姫様の命令なんですか？

龍之介 そうじゃないよ。

鶴 竜宮城が恋しくなったの？ あたしたちといるのがもうイヤになった？

龍之介 その反対だ。お鶴ちゃんやお亀ちゃんといるのが楽しくて、ついつい今まで帰りそびれた。

鶴 だったらずっと帰らないでよ！

龍之介 ごめんよ鶴ちゃん。ダメなんだ。

亀 馬鹿なの？ ねえ。龍之介は馬鹿なの!?

龍之介 虹色の亀に命を助けてもらった、そのご恩がまだ返せてない。おいら馬鹿なのは構わないけど、恩知らずにはなりたくないんだよ。

父 龍之介さんよ。あそこは俺たち人間が、気軽に行ったり来たり出来るようなところじゃねえんだ。あんただってわかってんだろう。半日あっちにいただけで、もとの世界はどうなった。

龍之介 ……おつかさんはとうに亡くなって、姉ちゃんはぐっと老けてた。

父 それでも姉さんに会えたあんたは運がよかったんだ。俺ん時は、ほんの四、五日留守したつもりが、三百年も経ってやがった。

亀 父ちゃん……そんな昔の人なんだ……。

鶴 確かにお松さんとは、生まれた年が違いすぎる……。

父 お松さんはな、亡くなったおつかさんに倣^{なら}って、月の出ねえ晩には必ずかがり火焚いて、おまえさんのこと待ってたんだ。たった一人の大事な姉さんに、あんたまた何十年もそんなさびしい思いをさせるつもりか！

お松 もういいんです、次郎さん。……わかったよ龍之介。竜宮城にお戻り。

鶴 なに言ってるの、お松さん！

亀 ダメだよ、そんなの！

お松 「受けたご恩は必ず返せ」と母から言われて育った子ども。このままここに残っても、自分の不義理を悔いながら、暗い顔をして四六時^{しるくじじゅう}中海を眺めているに決まってる。

鶴 それだって会えないよりはずっとましでしょ？

お松 どこにいたっていいのよ。幸せでさえいてくれるなら。

亀 父ちゃん！ このわからず屋の姉弟^{きょうだい}なんとかして！

龍之介 次郎さんになんとかしてほしいことなら、おいらにもひとつあるんです。父 なんだよ。

龍之介 玉手箱とあわせて、姉ちゃんももらってくれませんか？

鶴・亀 おー！

お松 龍之介！ あんた姉ちゃんをなにかの付録みたいに……！

龍之介 次郎さんのおっしゃる通り、これ以上、姉ちゃんにさびしい思いをさせて

おくのは心残りだ。どうか一緒になってやってください。弟のひいき目を抜きにしても、心根の優しい、よく気の遣える働き者です。

父 そんなことあおまえさんよりもよく知ってる。

鶴・亀 おー！

お松 次郎さん！ こんなたわ言真に受けちゃいけませんよ？ あたしたちは玉手箱さえ受け取っていただけたらもうそれだけで……！

龍之介 そう言わず、ぜひ姉ちゃんも。

亀 父ちゃん！ いっちゃえ！ 男らしく！

父 ……もし俺が首を横に振ったら、あんたは竜宮城行きを思いとどまってくれるのかい。

鶴 ああ、裏目に出ちゃった……。

龍之介 ……その時は、後ろ髪を引かれる思いで、姉ちゃんを一人残していくことになります。

亀 もー！ 龍之介の強情っぱり！

N 2 こうなったらもう次郎はお松さんと一緒になるよね。うん、よかったよかったです。

N 1 それどころではありません。

N 2 龍之介でしょ？ あんまり真面目すぎるのも考えもんだね。

N 1 亀ちゃんが溺れて死にかけました。

N 2 ええーっ！

N 1 朝から風の強かったその日、ちょうど引潮の時間に、気を失って波間に漂っている亀ちゃんを見つけたのは龍之介でした。初めは大きな魚かなとぼんやり眺めていましたが、それが亀ちゃんと気付くやいなや、冷たい水をもともせず、あわてて海に飛び込んで、得意の泳ぎで彼女を助け出したのです。

父 気でも違ったのかこの馬鹿亀！

鶴 龍之介さんがいなかったらどうなってたか。

父 自分より先に娘を送り出したなんてことにもなったら、俺はあの世で母ちゃんに会わせる顔がねえ！

亀 ごめん……。

お松 約束したじゃないの亀ちゃん。お父さんを悲しませるようなことはしないって。どうしてこんな無茶なことを。

亀 ちょっと、竜宮城に行こうと思って。

父 なにがちよつとだ！ 気軽に行けるようなところじゃねえって父ちゃんあればと言ったろう！ なんだってまたおまえまで……。

亀 ……だつてさ、龍之介は最初のお勤めでいきなりしくじっちゃうような人だ

よ？ 恩返しなんていつになったらできることやら、わかったもんじゃないでしょ？ だったらあたしが代わりに行って、「その説はありがとうございました」ってひと言挨拶してきた方が早いかと思って。

龍之介 お亀ちゃん……おいらのために……。

鶴 龍之介さん……。これでもういいんじゃない？

龍之介 なにがだい？

鶴 亀に助けられた龍之介さんが、今度は亀を助けたんだもの。ご恩返しは済んだんじゃない？

亀 あたしは虹色じゃないけどね。うん、そうだよ。鶴ちゃんうまいこと言う！

龍之介 だけど……。

鶴 龍之介さんが竜宮城に戻ろうとする限り、亀ちゃんはまた何度だって同じことを繰り返しますよ？ だからこれからはご恩返し代わりに、ここでこの亀を見守ってください。

龍之介 ……わかった。

鶴 約束して。

龍之介 ……約束する。

N 2 譲ったか……妹に……。

N 1 お姉ちゃんだから、我慢したのでしょ。

N 2 よかった。あたし、一人っ子で、

N 1 間もなく、鶴ちゃんに結婚話が持ち上がりました。お相手は、町で一番大きな呉服屋の若旦那で、この村へ釣りをしに来た時に、なにかと面倒をみてくれたお鶴ちゃんのがすっかり気に入ってしまったそうです。お鶴ちゃんもこのお話を素直に受け入れ、結婚への準備は着々と進められました。

お松 あたしてつきり鶴ちゃんは、龍之介のことが好きなのかと思ってた。

鶴 お松さんは……あ、もうお母さんか。

お松 いいのよ、今までどおり「お松さん」で。

鶴 いつから父さんのこと好きだったの？

お松 ……答えにくいことを訊くわねえ。

鶴 もう他人じゃないからね！

お松 ……浜辺で最初に出会った時からかしら。

鶴 ずっと黙ってるの、苦しくなかった？

お松 いいえ、全然！……と言えば嘘になるけど、気持ちにふたをすることは、それほど苦にならなかったわね。

鶴 父さんのことも母さんのことも好きだったから？

お松 そうよ。二人が幸せでいてくれるなら、それが一番だったから。

鶴 そうか……。

お松 鶴ちゃんも、幸せになってね。

鶴 はい。

父 すまねえなあ、鶴。嫁入り道具もろくに用意してやれなくて。

鶴 そんなこと気にしないでよ。あちらのお家にはなんだって揃ってるんだから。

父 まったくおまえも大した玉の輿に乗ったもんだよ。

鶴 ……でも父さん、アレだけ貰っていてもいいかな？

父 アレってなんだよ。

鶴 縄と鎖でぐるぐるに縛られてるアレ。あんなに綺麗なもの屋根裏にしまいこん

でおくんじゃもつたいないよ。

父 おまえがどうしてももってんなら、そりやあダメとは言わねえけど……。

鶴 ありがとう、父さん。大事にするね。

父 ……開けるなよ？

鶴 ……開けないよ。

N1 やがて桜の花が散る頃、いよいよお嫁入りの日がやってきました。乙姫様とまではいきませんが、花嫁衣装に身を包んだ鶴ちゃんは、まるでどこかのお姫さまのようでした。

龍之介 綺麗だなあ、お鶴ちゃん。お婿さんは果報者だよ。

鶴 ありがとう、龍之介さん。亀ちゃんのこと、よろしくね。

亀 いつでも遊びに帰っておいでね。あたしも龍之介と遊びに行くね！

鶴 うん。待ってる。

N1 こうして、美しい花嫁になった鶴ちゃんは、沈む夕日が美しい、浜辺の小さな村を後にしたのでした。

N2 (孫) どうして玉手箱もってお嫁にいったのかな。

N1 (祖母) さあねえ。知られちゃいけない胸の内と、開けちゃいけない玉手箱を重ね合わせて、それを手元におくことで自分を戒めたのかもしれないし、娘時代の思い出の品が欲しかったのかもしれないし……。その辺は訊かなかったからわかんない。あら、長話してたらもうこんな時間！ 急がないと年が明けちゃうよ。

孫 ……ちよつと待ってよ！ おばあちゃん、お鶴ちゃんと知り合いなの!?

祖母 あたしの母方のおばあちゃんだよ。あんたにとっては……ひいひいばあちゃん？

孫 ええっ！ あたし血がつながってんの!?

祖母 で、これが、その箱。

孫 ……なんの話？

祖母 さつきあんた「重箱代わりに使ってるこの古い箱なに？」って訊いたじゃない。
い。

孫 訊いたよ？

祖母 だから、あんたがいま伊達巻だてまき詰めてるその箱が、お鶴ばあちゃんが持って来たっていう玉手箱。

孫 はあ!?

祖母 早くそれ詰めちゃって！ あと黒豆と栗きんとんね。

孫 玉手箱!?

祖母 やだ、もう紅白終わっちゃう。

孫 ……開けちゃってんじやん！

祖母 開けなきゃおせち詰められないでしょ。

孫 いやいやそういう問題じゃなくて……そもそもなんで玉手箱におせち詰めてんの？

祖母 ちょうどいい入れ物がなかったんじやない？ おばあちゃんが子どもの頃から、うちはもうずっとこれだもの。

孫 いつ？ 誰が開けたの？ その時なんか起こった？

祖母 知らないよ。さつき話したので全部なんだから。あ、まだかまぼこ切ってない！
い！

孫 気になるよーっ！

祖母 いいからほら、急いで急いで。もうじき除夜の鐘が鳴っちゃうよ！

除夜の鐘の音。

おわり